

ヤング・フランケンシュタイン

■STAFF

Producer ············ MICHAEL GRUSKOFF
Director ············ MEL BROOKS
Screenplay by ············ GENE WILDER and MEL BROOKS
Based on the Characters in the novel "Frankenstein" by ············ MARY SHELLEY
Director of Photography ············ GERALD HIRSCHFELD
Music Composed and Conducted by ············ JOHN MORRIS
Orchestrations ············ JONATHAN TUNICK
Violin Solo by ············ GERALD VINCI
Film Editor ············ JOHN HOWARD
Production Disigner ············ DALE HENNESY
Set Decorator ············ BOB DE VESTEL
Makeup Artist ············ WILLIAM TUTTLE
Costume Designer ············ DOROTHY JEAKINS
Sound Editor ············ DON HALL
Special Effects ············ HENRY MILLER and HAL MILLAR

■CAST

Dr. Frankenstein ············ GENE WILDER
Monster ············ PETER BOYLE
Igor ············ MARTY FELDMAN
Elizabeth ············ MADELINE KAHN
Frau Blucher ············ CLORIS LEACHMAN
Inga ············ TERI GARR
Inspector Kemp ············ KENNETH MARS
Herr Falkstein ············ RICHARD HAYDN
Mr. Hilltop ············ LIAM DUNN
Medical Student ············ DANNY GOLDMAN
Blindman ············ GENE HACKMAN

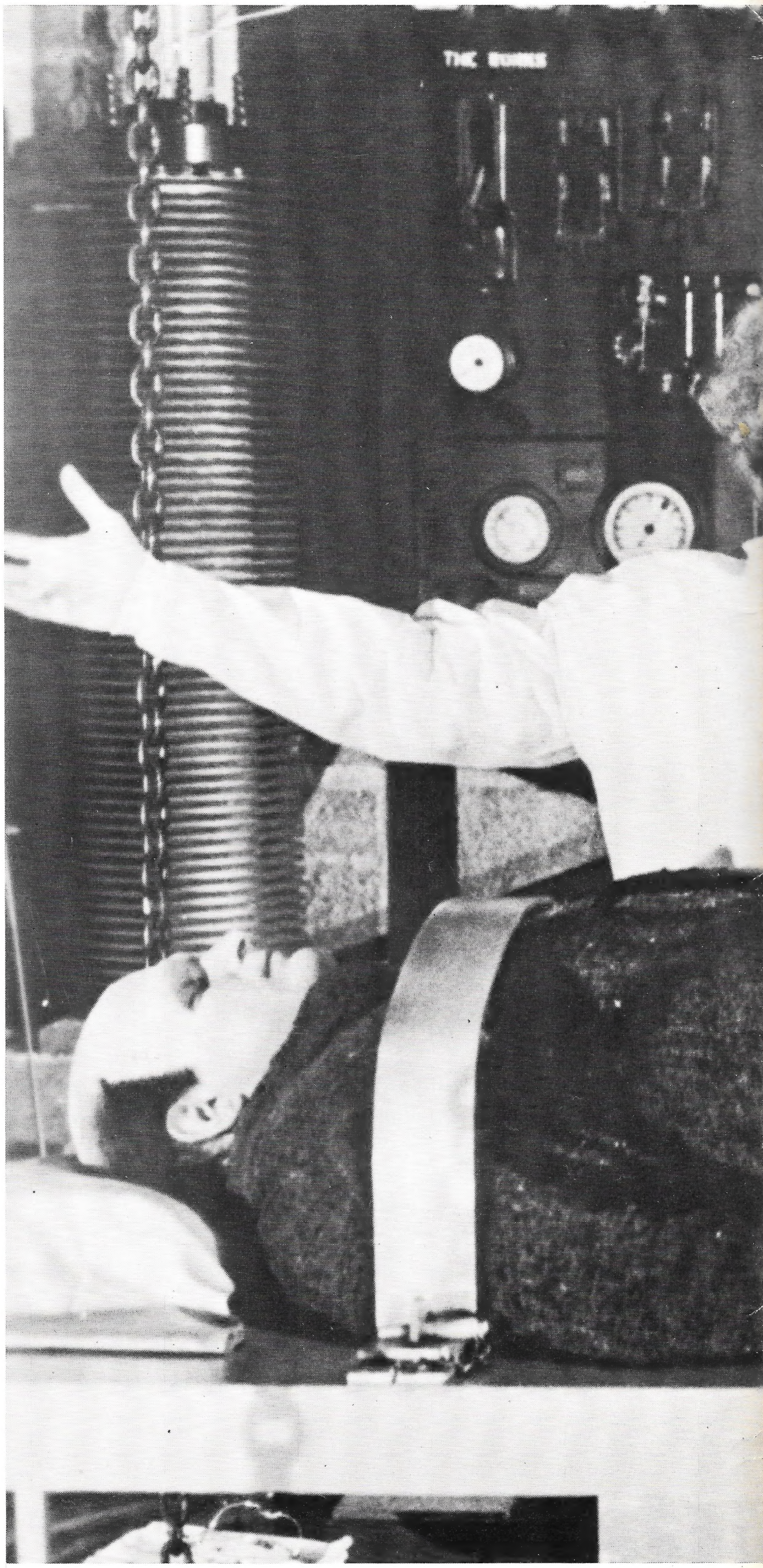


■スタッフ

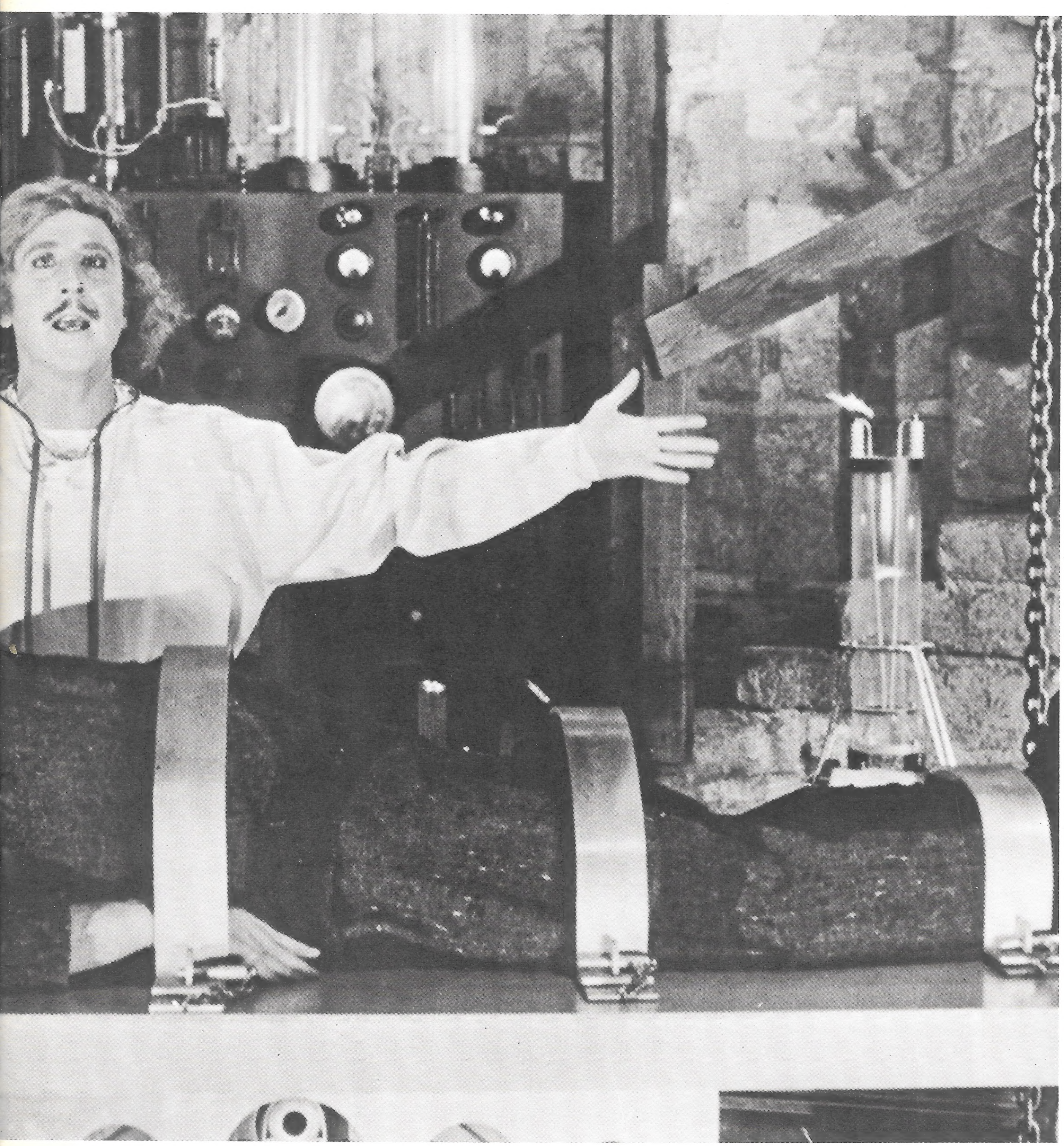
製　作············マイケル・グラスコフ
監　督············メル・ブルックス
脚　本············ジーン・ワイルダー
············メル・ブルックス
原　作············メリー・シェリーの小説「フランケンシュタイン」より
撮影監督············ジェラルド・ハーシフェルド
作曲・指揮············ジョン・モリス
編　曲············ジョナサン・タニック
バイオリン・ソロ············ジェラルド・ビンチ
編　集············ジョン・ハワード
美　術············デイル・ヘネシー
セット············ボブ・デ・ベステル
メーキャップ············ウィリアム・タトル
衣裳デザイン············ドロシー・ジェキンズ
サウンド編集············ドン・ホール
特殊効果············ヘンリー・ミラー
············ハル・ミラー

■キャスト

フランケンシュタイン博士············ジーン・ワイルダー
モンスター············ピーター・ボイル
アイゴール············マーティ・フェルドマン
エリザベス············マドライン・カーン
フラウ・ブリュッハー············クロリス・リーチマン
インガ············テリー・ガー
ケンプ警部············ケネス・マース
ファルクスタイン氏············リチャード・ヘイドン
盲人············ジーン・ハックマン



ヤング・フランケンシュタイン





写真は「フランケンシュタインの花嫁」(35年) より

フランケンシュタインから愛をこめて

メル・ブルックス監督は少年時代に熱中したフランケンシュタイン映画に敬意を表するために「ヤング・フランケンシュタイン」をつくったと語っている。この映画をいっそう楽しく鑑賞するには、フランケンシュタイン映画についていちおうの知識をえて，おくといい。

★まずフランケンシュタインというのは怪物を創造した博士の名前で，怪物には名前がなく，たんにモンスターと呼ばれている。この怪奇小説の作者はイギリスのメリー・シェリーという当時21歳の女流作家で，約150年前にこの物語を書いた。

★映画は1910年にアメリカでつくられて以来，すくなくとも30回以上つくられている。しかしそのうちでいちばん有名なのが1931年にユニヴァーサル社でつくられた　「フランケンシュタイン」である。フランケンシュタインの怪物といえばすぐに思いうかべる，首に木のくさびが打ちこまれ，いかにも死人の眼をした，グロテスクな化け物は，ボリス・カーロフによって演じられ,「フランケンシュタイン」はいちやく怪奇映画 NO.1になった。話は，今回のものと基本的には同じで，博士が死体に脳をつめこんで，死体を復活させようとするのであるが,助手が正常者の脳を落としてしまいかわりに異常者の脳を持ってきたため，怪物となるのである。

★「フランケンシュタイン」がヒットしたのでユニヴァーサル社では「フランケンシュタインの花嫁」(35)，「フランケンシュタインの復活」(39) を同じボリス・カーロフ主演でつくり，さらにロン・チェニー・ジュニアに交代して「フランケンシュタインの幽霊」(41)，その後もドラキュラや狼男などの怪物と共演する物語がつくられ，1950年代になるとイギリスでつくられるようになったが，これはイメージがまったくちがっている。最新作としては「悪魔のはらわた」もフランケンシュタイン物語であった。

★しかし「ヤング・フランケンシュタイン」がとりいれているのは，フランケンシュタイン物語からだけではない。博士の屋敷のあるトランシルバニアというのは吸血鬼ドラキュラのふるさとだし，主人公が屋敷へ向う途中では狼男のほえる声もきこえてきたりする。

★むかしの「フランケンシュタイン」映画といちばんそっくりなのは実験室で，それもそのはず，31年作品でつかった小道具で現在まで保存されていたものをそのままつかったのである。屋敷はフォックスの撮影所につくったが，死体を掘りおこす墓場はＭＧＭの屋外セットで，かつて「ミニヴァー夫人」でグリア・ガースンが結婚式をあげた場所，汽車の発着駅は「心の旅路」のセット，村人たちが屋敷へ押しかける山道は「グリム兄弟」のセットといったぐあいに，映画ファンなつかしのセットが使用されている。

物語

有名なビューフォート・フランケンシュタイン博士が死んでから17年経つと，彼の身内の者たちがトランシルバニア城の地下に眠る博士の棺の中から博士の遺書をとり出した。遺書によれば，ビューフォートの息子ビクターは，モンスター（怪物）をつくり出して家名を傷つけたので，遺産をひ孫のフレデリック（ジーン・ワイルダー）に譲るとあった。

フレデリックは有名な脳外科医で，アメリカのボルチモアのある医大の講師をしている。彼は衰えたフランケンシュタイン家の名誉回復を願っている。

ある日，フランケンシュタイン家の使者ファルクスタインがはるばるボルチモアへやって来て，フレデリックに会い，来意を告げた。フレデリックは，曽祖父の遺書により，家督を継がねばならない。だが，フレデリックはアメリカに滞まりたかった。それに彼にはエリザベス（マドライン・カーン）というフィアンセがいた。しかし結局，彼はファルスタインに説得され，トランスバニアへ行くことになった。

フレデリックがトランシルバニア駅に着くと，セムシの家僕アイゴール（マーティ・フェルドマン）が出迎えた。フランケンシュタイン家には，アイゴールのほかに老家政婦フラウ・ブリュッハーと小間使いのインガがいる。

フレデリックはその夜，悪夢にうなされた。インガが彼の叫び声を聞いて駆けつけて来た。二人は，やがてどこからともなくバイオリンが奏でる不思議な曲が流れてくるのを聞いた。そして二人は，偶然にも寝室から地下へ通じる道のあることも知った。好奇心に駆られて，二人はバイオリンの音色に導かれて地下へ降りて行き，地下の一室にバイオリンと吸いかけの葉巻が置かれているのを発見した。

フレデリックは，祖父ビクターがモンスターをつくった実験記録を読んだ。最初のうち，彼は軽蔑しながら読んでいたが，そのうち自分もこの実験をしてみたいと思い始めた。それにはまず，大男の遺体を必要とした。ちょうど大男が処刑され，教会の墓地に埋められたことを知り，夜中こっそり家僕のアイゴールたちと大男の遺体を掘り出し，それを屋敷に運びこんだ。次に必要なのは，遺体の頭がい骨の中に入れる脳髄で，しかも生前，頭の





働きの優秀な人間のものでなければならなかった。これもおあつらえむきのが，ある研究所に保管されているのを知ったフレデリックは，アイゴールをやらせて盗み出させた。ところが，アイゴールがとんだヘマをやらかし，盗み出したのはナント精神異常者のものだった。

大男の頭がい骨の中に，盗み出した脳髄を入れる手術を終え，あとは大仕掛けで複雑な機械装置で空から雷光をとり，それを大男の脳髄に通すという奇怪な実験を試みた。だが実験の結果は完全に失敗した。大男は記録どおりに甦っては来なかった。フレデリックは失望した。ところが，その夜の食事中，彼は地下から唸り声に似た奇妙な声が聞こえて来るのに気づいた。それは実験に失敗したはずの大男の声だったのだ。モンスターが息をふきかえしたのだ。

モンスターは，持ち前の異常性を発揮してフレデリックにつかみかかり，彼を殺そうとした。辛うじて居合せたアイゴールが彼の命令で，モンスターに鎮静薬を注射してそれを眠らせ，手術台の上に鉄製のベルトでしばりつけた。ところが，フラウ・ブリュッハーがこっそりモンスターを解き放したために，フレデリックが彼女をとがめると，彼女は，ビクター・フランケンシュタインと若い頃恋仲であったことや，モンスターは二人が協力してつくったものであったことを初めて告白した。フレデリックはこのとき，彼が屋敷に着いた夜，バイオリンの音を耳にしたが，それはフラウ・ブリュッハーが弾いたことを知り，その曲はトランシルバニアの子守唄で，先代モンスターが，この曲が好きだったのだ。

自由の身になったモンスターは屋敷を飛び出した。彼は，さまよい歩くうちに盲人（ジーン・ハックマン）の家へ入って行った。その盲人はモンスターを歓迎し，いろいろ親切にもてなそうとしたが，モンスターはそこからも飛び出し，行方がわからなくなってしまった。

自分の作ったモンスターも，バイオリンの曲を好むことに気づいたフレデリックは，トランシルバニアの子守唄の曲でモンスターをおびき寄せて捕え，屋敷に連れ戻し，実験室に閉じこめた。フレデリックは，モンスターは危険だからこれ以上生かしておけないと言ったが，それに反対するフラウ・ブリュッハーは，銃でフレデリックをおどした。

そうこうしているうちに，フレデリックは記録からモンスターの脳髄の主が甘言に弱い男であったことを知り，巧みにモンスターのご気嫌をとり結ぶことに成功した。モンスターは，フレデリックになつくようになった。

モンスターを完全に手なづけたフレデリックは，実験の成果を実物によって学界に発表するため，モンスターをブカレストへ連れて行った。学術発表会はある劇場で行われることになり，多数の学者や名士たちが集まった。

モンスターと一緒に舞台に立ったフレデリックは，実験の経過を発表した。余興としてモンスターが，フレデリックの唄に合わせてダンスを踊っていたとき，突然ライトの一つがショートして放電した。びっくりしたモンスターが呆然としていると，観客たちが野次った。するとモンスターは怒って暴れ出し，観客席に躍りこんだが，警官隊に捕われ留置場行きとなったが，ここでも看守にからかわれ，またぞろ暴れ出し，留置場から飛び出していった。

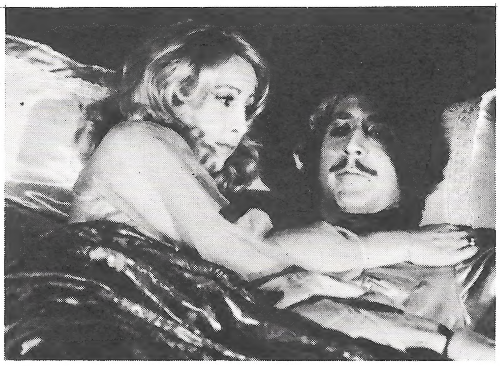
ちょうどその頃，フレデリックのフィアンセ，エリザベスがアメリカからやって来た。喜んだフレデリックは，彼女に接近しようとするが，彼女は相変らず彼を寄せつけない。

一方，村人たちは，ケンプ警部を先頭にフレデリックの屋敷におしかけて来た。フレデリックとモンスターを殺そうというのである。フレデリックが，必死にそれを防ごうとしているうち，エリザベスがモンスターにさらわれ悲鳴をあげながら森の中に姿を消してしまった。

モンスターは森の中で，エリザベスに恋をしかけた。その数七度にも及び，彼女はすっかり有頂天になってしまった。一方，フレデリックは，エリザベスの危機を救わんと，今度もバイオリンでモンスターを屋敷へおびき出して捕え，凶暴性をおさえる手術をしようとしたが間に合わず，そのとき，村人たちが屋敷になだれこんで来た。すると突然，これまで口のきけなかったモンスターが初めてしゃべり始めた。

モンスターが何を語ったか？　物語は意外な結末へと発展していった……。

解説







フランケンシュタインの物語なんて，とてもコワイのでしょうね？　とんでもない，最近こんなにおかしくて，笑いのとまらない映画は他になかった，と評判になっているのがこの作品なのである。怪奇映画No.1のフランケンシュタインという古めかしい題材をいかにも現代のテンポや風潮にぴったりなナウな笑いによみがえらせた傑作コメディ——名づけて「クレイジー・コメディ」と呼ばれているのがこの映画だ。アメリカばかりか，パリやロンドンでも大ヒットをつづけ，パニック映画の超大作に匹敵するほど世界の若者にウケている。

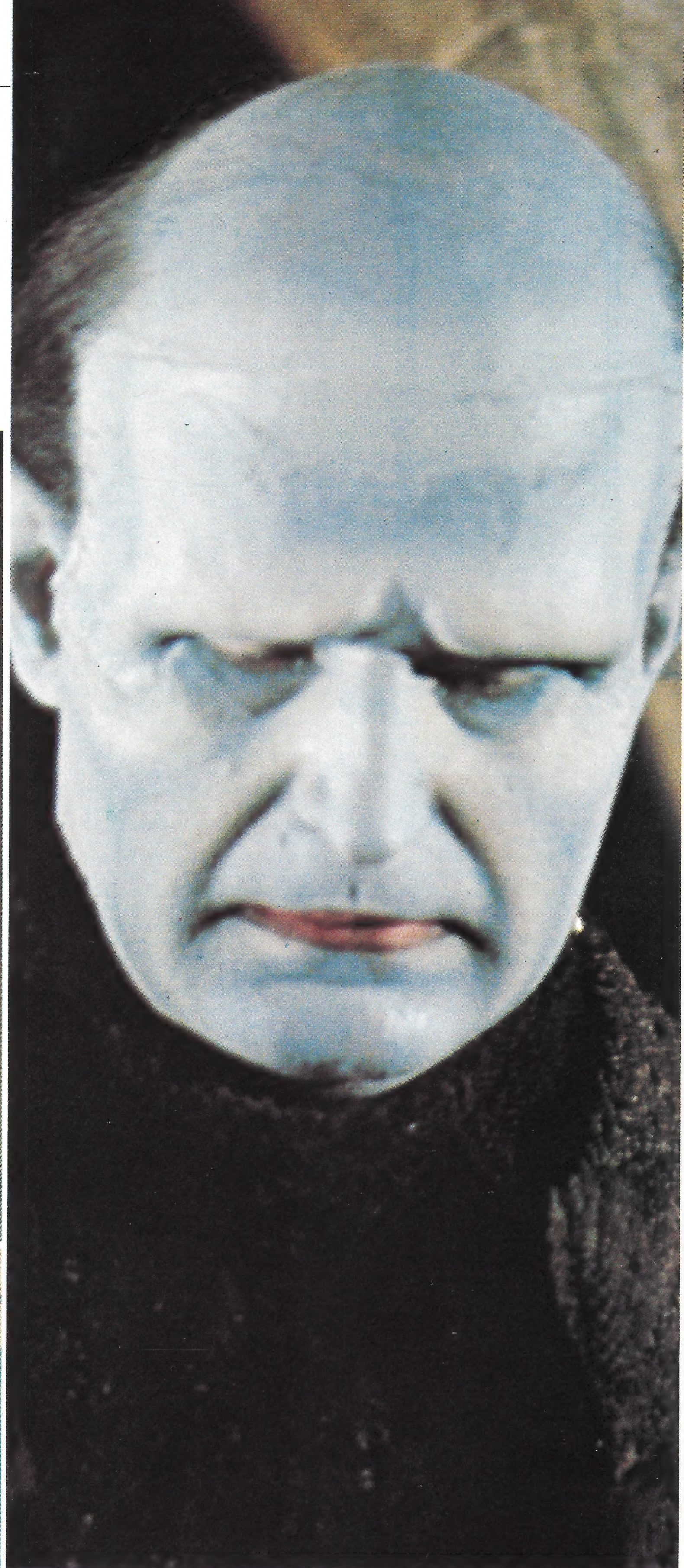
脚本・監督のメル・ブルックスはテレビでコメディの台本を書いていた才人だが，映画に進出後「プロデューサーズ」でアカデミー脚本賞を獲得。西部劇をコメディ化した74年の「ブレージング・サドルス」も大ヒットし，いまやアメリカ映画でいちばんもてはやされている監督である。プレイボーイ誌やニューズウィーク誌もつぎつぎと特集している。

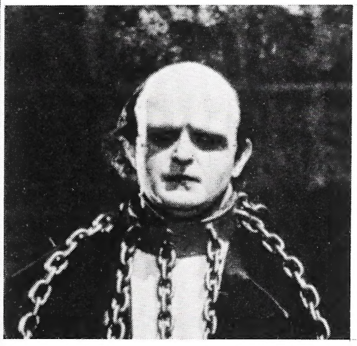
フランケンシュタイン博士を演じるジーン・ワイルダーは，このメル・ブルックスとコンビを組んで売りだしている俳優で，最近は「星の王子さま」でも大役を演じている。この映画ではブルックスとともに脚本を執筆するはりきりようだ。モンスター役は「ジョー」のピーター・ボイル。さらにロンドンのテレビ・コメディの人気者マーティ・フェルドマン，昨年「ブレージング・サドルス」でアカデミー賞候補になったマドライン・カーン，「明日に向って撃て！」「ラスト・ショー」(オスカー受賞）のクロリス・リーチマン，テレビ出身で「カンバセーション」に出演したテリー・ガー，「明日に向って撃て！」でブッチとサンダンスの追っ手を募る保安官役を演じ「パララックス・ビュー」に出演したケネス・マースなどが出演しているが，いずれも芸達者，珍奇ともいえるおかしな共演をくりひろげている。もう一つの話題は「フレンチ・コネクション」のジーン・ハックマンがたくみな変装で特別出演していることで，さてみなさんにもうまくその変装ぶりが発見できますか？

音楽監督は「ブレージング・サドルス」のジョン・モリスだが，“プッティン・オン・ザ・リッツ”“アイ・エイント・ゴット・ノーボディ”“アー・スイート・ミステリー・オブ・ライフ”などなつかしい曲をいくつもとりいれ，ブルックス自身も多才ぶりを発揮して“ロール・イン・ザ・ヘイ”という曲をつくった。製作は「ラスト・ムービー」のマイケル・グラスコフである。

（上映時間◆1時間47分）





奇抜で突飛でエロっぽい恐怖映画

園崎昌勝（映画評論家）

映画をみるとき，私はできるだけ予備知識をもたないで見ることにしている。なぜなら，へたに下地があると，勝手なところで妙な期待をもったり，ドラマの進行を，自分のすきなように想像したりする。そしてその期待や想像が外れると，必要以上にがっかりするからである。

商売柄，私はあらゆる種類の映画を毎日のようにみている。従って題名や監督・俳優名だけでも，ある程度その作品のイメージを自分の頭のなかり創りあげることができる。その意味で，正直に告白すると，1910年（明治43年）にアメリカ映画で初めて作られたという《フランケンシュタイン》なる語感だけで今度のこの『ヤング・フランケンシュタイン』には，最初あまり食指が動かなかったのである。

かの有名なるボリス・カーロフが扮する怪物の“フランケンシュタイン”は，昭和の初頭から何本となく見てきた。そしてボリス・カーロフがその決定打として，全世界の評価を定着させていたのだから，今更という気がしていたことは確かである。

以上のような理由から，私は最初の試写の通知をもらった時，その日のその時刻にはほかの作品を見ておかねばならなかったせいもあって，『ヤング・フランケンシュタイン』のほうは行かなかったのだ。そして最初の試写から2ヵ月以上も経って，前述のように何の予備知識もなく，軽い気持で——ということは，いくぶん莫迦にして見て，驚いた，魂消た，動転し，感心した，しかも心から笑ってしまったのである。そして私の不明を恥じると共に，題名だけによる片寄った先入観から，この見事な作品を妙に敬遠していた私の偏見を，メル・ブルックス監督を初めこの映画のスタッフ，キャストの全員に，平身低頭して詫びたいくらいの気持になった。

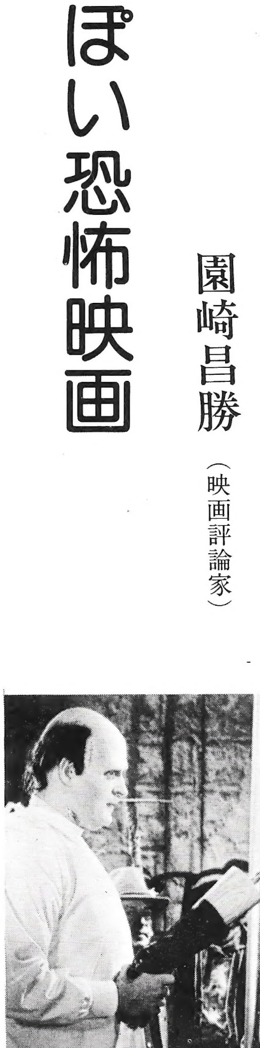
事実この平凡な題名から，これだけ異色の喜劇が生れているとは想像もできなかったのだ。私もこの世界に入って相当長いが，はっきり言ってこれはひとつのハプニングだった。これと全く逆のケースが時にはないでもないが，今度のようなハプニングなら何度あってもいい。ただ私などは商売だから，何度目かの試写の日取りに合せて気軽に見に行けばいいのだが，一般の観客には，この変哲もない題名だけで吸引力のほうは大丈夫なのだろうかみたいな不安もちょっとつき纒う。

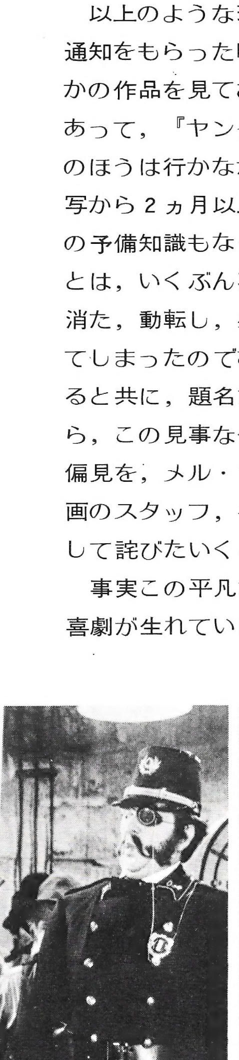
原題をそのまま邦題にしたのだから，仕方がないと言えばそれまでだが，例えばいま流行りの《おかしなおかしなフランケンシュタイン》などとつけたら，いくぶん内容を想像させてとくなんじゃないかしら，などと考えてみたが，何だか猿真似くさく，第一長たらしくて締まらないから駄目。やはり映画会社の専門家に任せましょう。

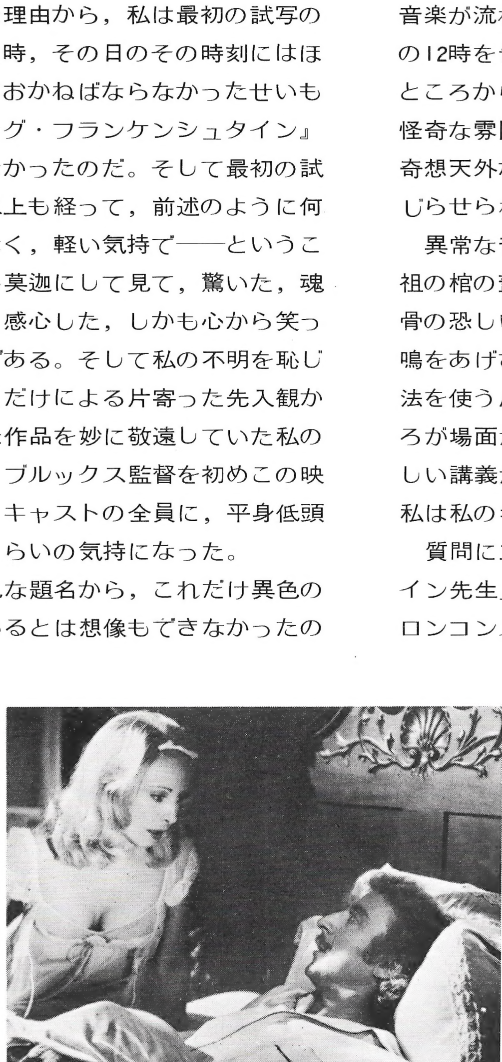
さて，この『ヤング・フランケンシュタイン』は，恐怖映画なのだろうか喜劇映画なのだろうか。勿論その両方をうまくミックスしたからこそ，この奇抜な映画が誕生したのであろう。極端に言えば，全く新しいジャンルの映画だとも言える。ジョン・モリスの壮重な音楽が流れるなかで，古風な柱時計が真夜中の12時を告げ，ゆるい調子で邸内に鳴り渡るところからドラマは始まる。陰に籠ったその怪奇な雰囲気から，どうしてあれだけ愉快で奇想天外な場面が次々と展開し，腹の筋をよじらせられると誰が予測できただろうか。

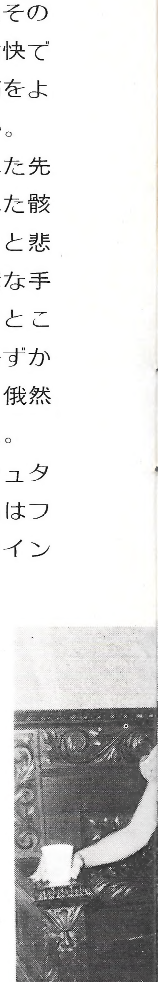
異常な音響とともに，地下に安置された先祖の棺の蓋をあけ，いきなり白骨化された骸骨の恐しい形相を見せ，観客にキャーッと悲鳴をあげさせた時，まだ私はなんと陳腐な手法を使うんだろうくらいに思っていた。ところが場面が一転して，大学で脳外科のむずかしい講義が始まっている情景になって，俄然私は私の考えを改めざるを得なくなった。

質問に立った一学生が，「フランケンシュタイン先生」と言うのに対して，「私の名はフロンコンスティンで，フランケンシュタイン









ではない」と先生が否定する辺りから，画面の進行が様子をガラリと変える。次いで彼が許嫁のエリザベスと駅頭でしばしの別れを惜しむ場面になって,我が意を得たりとばかり，私は画面に釘づけになってしまったのだ。エリザベスに扮するマドライン・カーンの艶っぽくって柔軟な名演技が深く印象に残る。お別れのキスは，これからパーティーに行くから唇は駄目，頭髪の型がこわれるから抱擁は駄目のと，さんざん相手をじらしておいて，別れの辛さを濃厚に長々と演技したあと，汽車は出て行く煙は残る，その煙に咽せて彼女の投げキスもさまにならない可笑しさ。ブルックス監督，やるなッ！と，そのとき私は思わず唸ってしまった。

フレデリック博士をトランシルバニア駅に出迎えた傴僂男の家僕が，イゴールと呼ばれてアイゴールなんだと言い直すギャグは，最初のフロンコンスティンとやや重複する感じだけれど，古い邸に着いた時，家政婦がブリュッハー夫人だと自己紹介すると，とたんにいま乗ってきた馬車の曳き馬が，一斉に前脚を踊らせて嘶くギャグは，恐らく初めての着想ではないかと思う。そのあと，ブリュッハーという名が出るたびに，それが室内で小さく囁かれたときでも，電波のように馬へ感受されて，姿は見えないが嘶く声だけが，木霊のように部屋まで聞えてくる。それが何を意味するのか結局私には分らなかったが，怪物をつくり出して騒がれた祖父のビクター・フランケンシュタインと，ただならぬ仲だったという見るからに怖い老家政婦ブリュッハーに，先代か先々代の馬たちが，ひどくいじめられたかなにかして，ブリュッハーという呪文だけでとたんに怯えてしまうという意味かもしれない。それは見るひとの解釈に任せよう。

フレデリックと家僕のアイゴールが，屍体を運搬するのを見て不審に思ったケンプ警部の，大きな金属音を発して義手を屈折させる動作など，ややスラップスティックな古い手法を思わせないでもないが，サイレント時代の，形と動きだけで哄笑させた昔の短篇喜劇に，あまり馴染みのない若いひと達には，きっと受けるのじゃないかと思われる。ところでその義手が，よく気をつけて見ていないとわからないが，反対側の手になった場面があった。妖怪な家僕アイゴールの，肩の瘤が時に左から右へ移って，主人のフレデリックが「お前の瘤は左側じゃなかったのか」と驚く台詞がある所をみると，義手の移行も勿論意識して使っているギャグであることがわかる。

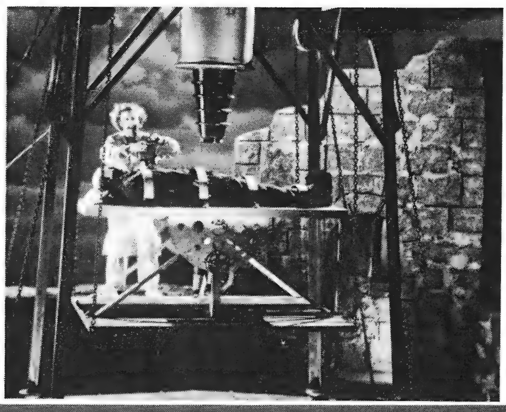
もうひとつ，劇場の学術発表会で，おとなしくなったモンスターと鮮かにステップをふんだフレデリックが，終ったとたん，ポケットから角砂糖をひとつ出して，立っているモンスターの口にぽんと放りこんでやる仕草，これは猛獣使いが，ひとつの芸をうまくすませた猛獣に，ご褒美として与える常套手段である。モンスターを猛獣なみに扱った面白さ，画面ではたった一度だけだったが，私はここでもやるなァ！と，第２回目の唸り声を発してしまったのである。

その他，笑わせる種は数えきれないほどあったが，この怪奇映画のなかに，なんと強烈なエロティシズムが秘められていたとは。フレデリックが実験室で「昇天させてくれ」と言うと，何を感違いしたか女助手のインガが「今ここで？」と戸惑った顔付で訊き返すユーモア。意味はお分りでしょ!?また許嫁のエリザベスが，怪物に犯されながら「天国へ登る気持」と歌う悩ましいソプラノが，最後にインガの同じ歌と重なって，“大きいことはいいことだ”と聞えてくるのは，私の僻目だったろうか。

いまどき珍しいモノクロームのスタンダード版というのも，古風な雰囲気の再現にマッチして，この映画には却て効果的だったことを強調しておきたい。


















Freshly Dead





現代的なおかしさとやさしさの世界

筈見有弘（映画評論家）



この映画がすっかり好きになってしまって，もう四回見た。見るたびに，いままで気づかなかったおかしさを発見したりするので，ちっとも退屈するということがないのである。

はじめの三回は批評家の先生やジャーナリストといっしょに試写室で見たのだったが，四回目はフォックスの宣伝部がモニターのためにおこなったホールでの試写だった。この映画についてほとんど予備知識のないお客さんばかりだったのに，じつによく笑っていた。ところがその笑いの個所というのが，試写室で専門家が笑う個所といくらかちがうのである。これもおもしろい発見だった。

映画の専門家は，どちらかというとパロディとしてよろこんでいる。ようするにボリス・カーロフの主演した，かの名高き「フランケンシュタイン」をみごとにパロディにおきかえたおかしさである。「フランケンシュタイン」ばかりではなく，「ドラキュラ」の棲地トランシルバニアがでてきたり，狼男のほえる声がきこえたり，イゴール(ただし本人はアイゴールという）とか警察署長だとか，そういう登場人物もあちこちからもってきている。

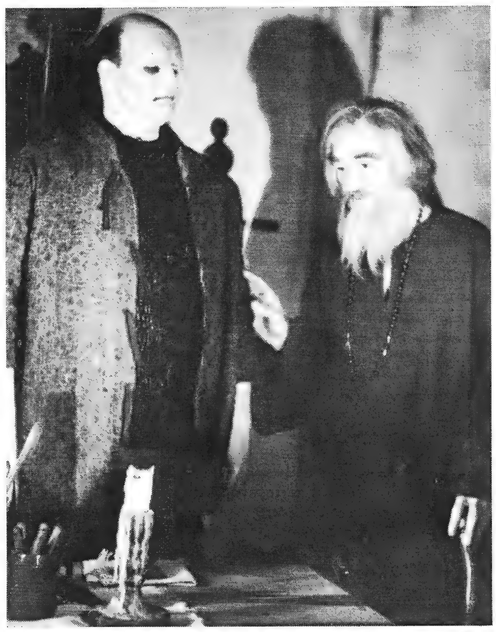
じっさいメル・ブルックス監督はパロディが大好きで，前作の「ブレージング・サドルス」は，はなやかなりしころの西部劇をパロディにし，マデライン・カーンがマルレーネ・ディトリッヒの真似をやったりする。「ヤング・フランケンシュタイン」でもフランケンシュタインとモンスターがタップを踊る“プッティン・オン・ザ・リッツ”というナンバーは1930～40年代ミュージカルでおなじみのものである。

けれど，そういうおかしさは若い観客にはわからない。モニター試写で笑っているのは，もっとべつのところだった。たとえば助手のイゴールが実験室の屋上で電気をとるためにカミナリに向ってタコをあげている。下から博士が「早く降りてこい」と叫ぶ，ふと横をみるともうそこにイゴールがいるじゃないか。まったく現実ばなれしたスピードである。

このイゴールはいちばんの笑わせ役だが，彼の右肩にはコブがついている。ところがこのコブがあるシーンでは左肩に移行しているとは！　ここはセリフでちゃんと笑わせるけれども，警察署長の右手の義手もほんの一瞬だけ左手にかわってしまうフシギさ。









あげていけばいくらでもあるけれど要するにこういうシーンで若い観客はゲラゲラ笑っているのである。極端ないい方をすれば，これはシュールリアリズムの笑いだ。今ふうにいえばナンセンスな笑いとかクレージイなおかしさといっていい。「男はつらいよ」式の人情のからまったおかしさとはちがって，理屈や説明ぬきのおかしさである。テレビの「８時だよ全員集合」とか，あるいは大ブームを起したナンセンス・クイズが証明するように，笑いはようやくシュールリアリズム化して本来の姿をとりもどしたのではないだろうか。

それがこの映画が世界中の若者にうけ，おそらく日本でも大歓迎されるであろう理由である。

題材からいっても，モノクロ普通サイズという画面からいっても，きわめて古くさい映画にみえるかもしれない。その古めかしさをたいへんナウにしたのがこの作品なのだ。このことはメル・ブルックス監督の経歴をしらべてみるとよくわかる。テレビでしきりにジョークの台本を書いていた時代の仲間といえば，「卒業」のマイク・ニコルズであり，その相棒の脚本家バック・ヘンリーである。

「ラスト・ショー」のピーター・ボグダノビッチともきわめて近い関係にある。だからマドライン・カーン，クロリス・リーチマンといったボグダノビッチ一家の常連俳優がひっぱりだされている。そういえばボグダノビッチが過去を題材にとりながら，フレッシュな映画をつくっているのと，かなりよく似ているではないか。特別出演のジーン・ハックマンも仲間の一人である。

メル・ブルックスもやはり1970年代を代表するにふさわしい才能の一人であることがこの人脈図からうかびあがってくる。そしてこの「ヤング・フランケンシュタイン」がラストにいたってセックスの笑いに変貌するとき，いっきょにきわめて現代的な変貌を完成させるのである。見終ったあとで，グロテスクさなどまったくなく，モンスターとその創造者，恋人たち，イゴール，警察署長，すべての登場人物は，作者のやさしいほほえみのなかで，いっぺんのファンタジーをつくっていたことがわかる。

機会があれば，まだ何回でも見たいと思っている。





▶屋上シーンのセット風景



セットに息子と愛妻アン・バンクロフトの訪問を受けてゴキゲンなブルックス監督

監督 メル・ブルックス

ことしの2月17日号のニューズウィーク誌にまことに珍なるインタビュー記事がのっている。質問をうけているのは〈2000歳の映画監督〉を自称するメル・ブルックス。ちゃんと石器時代のかっこうをした写真までのっているが，じつはブルックスはそのスタイルでウィスキーのＣＭなんかに出ているのだ。そのインタビューの珍ぶりをちょっと紹介すると

Ｑ　一緒に仕事した俳優でいちばんおもしろかった人は？

Ａ　信じないかもしれんが，青い蟹(かに)だね。

Ｑ　カニ？　そのカニがどうしたんです？

Ａ　ヤツは横歩きも，上へも下へも，どんなふうにも歩けたんだ。でもあのころの映画には横歩きしか必要なかった。フレッド・アステアなんか生まれてなかったころさ。この歌って踊るカニは「ブロードウェイの横歩き」「リオの横歩き」「横道それてステップすれば」に主演したんだ。

以下，上映時間が100年間つづいた映画の話だとか，徹底してジョークばかり言っているのである。メル・ブルックスという男はジョークのために生まれてきたような男，〈世界一のおかしな男になること〉が昔からのあこがれで，ついにそれを実現させた人物なのだ。

1927年ブルックリンのゲットー生まれ。つまり貧しいユダヤ人だった。14歳で近所の人からドラム叩きを教えてもらい，クラブなどに出演するようになったが第二次大戦がはじまり海軍に召集され，ヨーロッパ戦線へ渡った。帰還後ふたたびドラマーになったが，いなか町のホテルで演奏しているときコミック・チームが休んでしまったので，即興でユダヤことばをたくさんいれながらコミックをやったところこれが大ウケ。ドラマーは廃業してボードビルの芸人に転向したのだったが，テレビの番組をもつことになった売出し中の芸人シド・シーザー(「エアポート'75」に映画俳優の役で出演していた男」にたのまれて，彼の番組の台本を書くようになった。このコンビのジョークは大いに人気をよび，やがて「ショーのなかのあなたのショー」というゴールデン番組になった。

ほかのＴＶ番組の台本も書いたし，ブロードウェイの舞台も手がけたし，ソングライターとしても活躍するようになった。映画のシナリオも54年の「ニュー・フェーセズ」を執筆したが，その後中断，68年にふたたび「プロデューサーズ」で脚本のみならず製作・監督も手がけ，これがアカデミー脚本賞を受賞し，いよいよ映画中心の活躍がはじまった。70年「十二個の椅子」，74年「ブレージング・サドルス」，そして75年「ヤング・フランケンシュタイン」を脚本・監督，早くも新時代の笑いの代表選手になってしまった。この大ヒットでフォックスと年間の契約をしたから，とうぶんブルックス流のジョークを楽しめることになる。

意外なことが二つある。その１――夫人が「卒業」の名女優アン・バンクロフトであること。再婚で，前夫人との間に三子あり。

その２――最も敬愛する映画はおよそ正反対なイタリアン・リアリズムで，ことにデ・シーカの「自転車泥棒」を大傑作にあげていること。

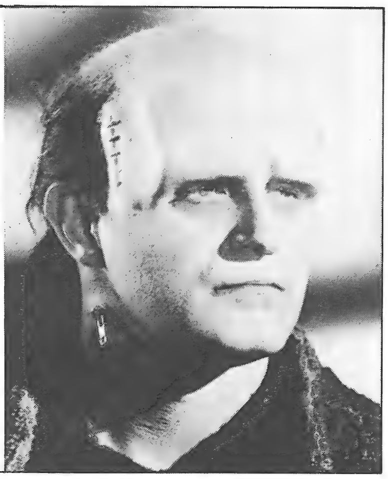
ジーン・ワイルダー



もじゃもじゃの髪に大きな眼——まじめに演じれば演じるほどそらとぼけたおかしさがでてくる。強烈な個性をもっているが，一面ソフトで,人の好さそうな素顔ものぞかせる。もとはイギリスのオールド・ビク座で修業をつんでシリアス劇をこころざしていたのだったが，メル・ブルックスとの出あいで，すっかりコメディづいてしまった。ブルックスにいわせると「世界一の役者だよ」ということになる。「ヤング・フランケンシュタイン」のアイデアはじつはワイルダーからでたものでブルックスと共同でシナリオ執筆となった。これですっかり自信をつけ，もっかロンドンで「シャーロック・ホームズのスマートな兄」の監督にまでのりだしている。むろん・脚本・主演も彼自身である。ことしはキツネにふんして飛びまわる「星の王子さま」も登場したし，いよいよ才人ワイルダーの時代がはじまったようである。

1934年，ウィスコンシン州ミルウォーキーの生まれ。アイオワ州立大学にまなんだが，15歳のときから熱中していた演劇で身をたてる決心をし，イギリスに渡ってブリストルのオールド・ビク一座に研究生として入った。ニューヨークへ戻ってから，運転手やイギリス時代に習得したフェンシングのコーチをしたりして生計をたてながらチャンスをねらいオフ・ブロードウェイから，ブロードウェイの「肝っ玉おっかあ」「ラブ」などの舞台に進出した。映画には67年の「俺たちに明日はない」の小さな役（ユージン・グリザード役）でデビューし，翌年の「プロデューサース」（日本未公開）でメル・ブルックスに起用された。その後「ブレージング・サドルス」(74年・日本未公開）でふたたびブルックス作品に主演し才能がみとめられた。他に「ウィリー・ウォンカとチョコレート工場」(70年)，「さい」(73年）その他があるがいずれも日本未公開である。

ピーター・ボイル



このモンスターのメーキャップでは本物がどんなご面相か判断がつかないかもしれないが，本物もまだ40歳には間があるというのにハゲあがっているのだ。まったくもって美男子という系列ではないのに「ジョー」などで“おくれてきた春青”を演じたりして，けっこうあちらでは売れっこの異色俳優である。

1937年フィラデルフィア生まれ。父親は子供向けのアニメーション作家だった。ラサール・カレッジを卒業し，海軍をへてニューヨークで演技を学び，地方巡業の舞台に立つようになり，舞台の「おかしな二人」でチョイ役を演じたりした。やがてブロードウェイに進出したり，テレビのＣＭが話題になったりニュースショーにレギュラー出演したりで注目されはじめた。映画デビューは66年の「グループ」が第一作で，以後「アメリカを斬る」(69年)，「ジョー」(70年)，「愛はひとり」(71年）など。

マーティ・フェルドマン



妙な俳優もいるものである。眼玉がやたらに大きい。どうやらあれは本物らしい。肩にコブがのっている。もちろんこれは役の上でのつけコブだ。ことしのアカデミー授賞式に出席していたが，髪は金髪でもじゃもじゃ，とび出そうな眼をした異色の風釆がひときわめだっていた。

1934年ロンドン生まれ。ポーランドとロシア系の血が流れている。メッセンジャー・ボーイ，ジャズのトランペッターなどののち，仲間とコメディー座を組織して巡業中に認められ，54年からBBCテレビにしばしば出演するようになった。69年からのコミック・シリーズ「どの家も一つは持たなければならない」で人気者となり，イギリス映画には数本出演しているが，ハリウッドへのデビューはこの「ヤング・フランケンシュタイン」である。もっかジーン・ワイルダーの初監督「シャーロック・ホームズのスマートな兄」に出演しているので，とてもたのしみだ。

マドライン・カーン



メーキャップから髪の型，セリフの一つ一つまで，やることなすことすべておかしい。こんなにおかしさ一色に塗りつぶされたような女優はそういるものではない。ブルックス監督と組んだ前作「ブレージング・サドルス」ではマルレーヌ・ディートリッヒのパロディをやってのけて，アカデミー助演女優賞にノミネートされたほどである

1942年 9 月29日，ボストン生まれ。ホフスタ大学を卒業しているが，68年からミュージカルの舞台に立ち芸達者ぶりを披露。ダニー・ケイと出演した「ツー・バイ・ツー」や「キャンディード」「ラ・ボエム」「ショウボート」などがおもな舞台である。映画には短編「鳩」に出演したが，本格的デビューは63年の「おかしなおかしな大追跡」で，つづく「ペーパー・ムーン」の下司なストリッパー役でいちやく注目された。ほかに「ベージル・E・フランクウェイラー夫人のごっちゃの書類から」（74年）がある。

クロリス・リーチマン



「わたし，ブリュッハー夫人です」と自己紹介して登場する。すると馬がヒヒヒーンといななく。そのあともだれかがブリュッハーと呼ぶたびにヒヒヒーン。いったいどうなってるのかね。斜にかまえたようなやけにおっかない表情であらわれるが，むかしフランケンシュタイン博士といろいろあったらしい。とにかくじつに達者な演技で楽しませてくれる。

1930年アイオワ州デス・モアネス生まれ。ノースウェスタン大学卒業後，アクターズ・スタジオに入り，48年以来舞台で活躍。テレビの「メリー・タイラー・ムーア・ショー」のコメディ役で注目されるようになった。映画デビューは69年の「明日に向って撃て！」で「ラスト・ショー」(71年）の人妻役でアカデミー助演女優賞を獲得。他に「ふたりの誓い」(70年)，「デリンジャー」(73年)，「デイジー・ミラー」(74年）など。監督ジョージ・イングランド夫人である。

テリー・ガー



フランケンシュタイン博士が何か言うと，すぐにセックスのことかと早トチリしてしまう助手。なかなかのグラマーだが，いやらしい感じはまったくない。サラっとした魅力をもつ前途有望の新人女優である。

生まれはハリウッド。父親は映画俳優エドワード・ガー，母親は踊り子だった。父親の仕事の関係でニュージャージーへ移ったりしたが，彼女が11歳のとき父が死に，母親が映画やテレビの衣装係をつとめることになったため，ふたたびハリウッドへ。「ヤング・フランケンシュタイン」では母も衣装係として働いた。テリーはバレリー・ステート・カレッジ卒業後，バレエを習得し，いくつかの映画やテレビで群舞の一人をつとめた。その後リー・ストラスバーグなどについて演技を学び，「バーンズとシレイバー・コメディ・アワー」や「エルビス・プレスリー・スペシャル」などに出演。74年「カンバセーション」で小さな役についたのち，今回の抜擢となった。



海外雑誌・新聞の評

クレイジー・コメディである。こんな種類のクレイジーぶりは近年の映画にはなかった。メル・ブルックスはあなたをどうしようもないほど笑わせてくれる。

——ポーリン・ケール
（ニューヨーカー誌）

今日のどんな映画より，おかしく，奇妙で，魅惑的である。　——ジェイ・コックス
（タイム・マガジン誌）

まったくおかしな天才ワイルダーとブルックスの凱旋。　——ジュディス・クライスト
（ニューヨーク・マガジン誌）

現代にぴったりのメル・ブルックスのおかしな喜劇。　——ビンセント・キャンビー
（ニューヨーク・タイムズ誌）

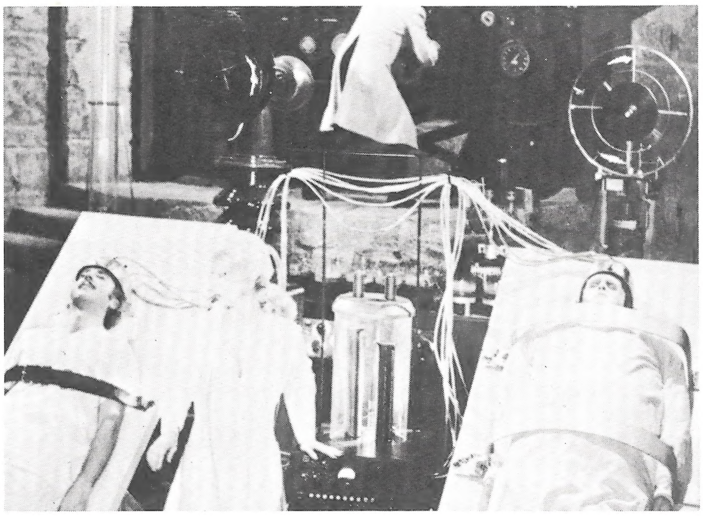
映画には毎年メル・ブルックスのしっちゃかめっちゃかなおかしい作品が必要である。
——ＭＵＲＥ（デイリー・バラエティ紙）

スリリングでクレイジー……笑いの豊かさ。いつまでも観客に愛されるであろう上等のコメディだ。　——チャールズ・チャップリン
（ロサンゼルス・タイムズ紙）

昨日この映画について話そうとしたんだ。だけどあんまり笑いっぱなしで，話ができなかったよ。　——ジーン・シャリト
（ＮＢＣテレビ）

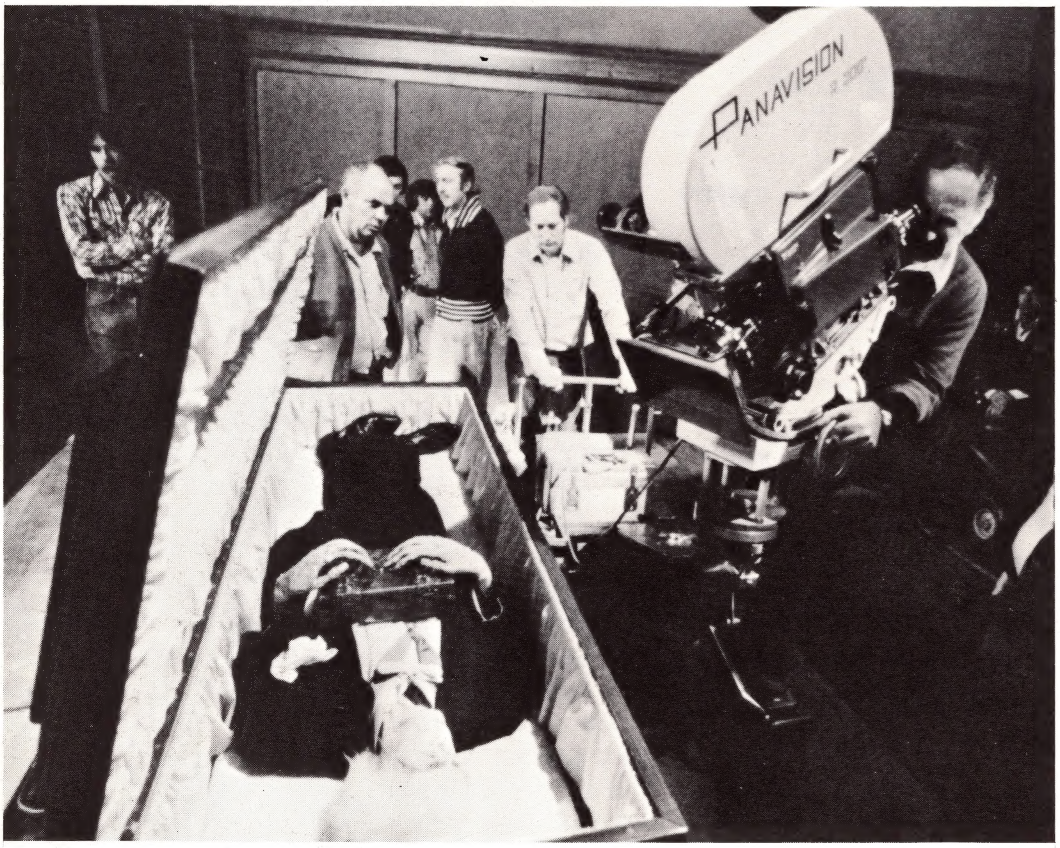
メル・ブルックスがふたたびパンチをくわせた。おなかが痛くなるほど次から次へと笑わせる。当世風で完全なコメディの傑作だ。
——ウィリアム・ウォルフ
（キュー・マガジン誌）







▼冒頭シーンの撮影でカメラをのぞくブルックス監督



▶ふざけあうブルックス監督と主な出演者達



SYNOPSIS

Seventeen years after the death of Beaufort Frankenstein, his coffin is opened in his Transylvanian castle and his will is read to a group of aging and anxious relatives. Convinced his son Victor has disgraced the family name by creating a Monster, Beaufort decrees that his estate shall go to his great-grandson, Frederick (GENE WILDER), a noted brain surgeon now living in America, in hopes he will restore dignity to the family name.

An Emissary (RICHARD HAYDN) is sent to Baltimore where Freddy is a lecturer in a medical school. Freddy, too, feels the family name has been stigmatized and is reluctant to accept his inheritance. Besides, he is about to be married. However, he is persuaded and says good-bye to his fiancee, Elizabeth (MADELINE KAHN), who seems more concerned with her coiffure than with Freddy.

At the Transylvania Station Freddy is greeted by the hunchback Igor (MARTY FELDMAN) and the magnificently endowed Inga (TERI GARR), who seems compliant. At the imposing Castle Frankenstein he meets the forbidding Frau Blucher (CLORIS LEACHMAN), the housekeeper.

Freddy is afflicted with a nightmare in which a voice insists he will not escape his destiny. Inga hears him crying out and awakens him. They hear a strange Transylvanian Lullaby played on a violin. In trying to trace the source of this music, Inga lifts a candle from its sconce and a bookcase revolves. Behind it is a cob-webbed passage.

Freddy and Inga follow it past a line of skulls to encounter Igor, who says the same weird music has drawn him to the place. In an adjoining room they find a violin and a still-smouldering cigar, but no clue to the occupant. But Freddy also discovers this is the repository for all his grandfather's secret notes.

Freddy begins reading his ancestor's records of his experiments, at first with derision, and then his genes and chromosomes take possession of him and he resolves to repeat the experiment!

He needs a large man because so many of the components of the human body are small. He learns that such a man is being hanged that very night and Freddy and Igor exhume him and take him to the castle. Now Freddy needs a large brain to go with this magnificent body and determines to use that of the brilliant D.H. Delbruck, recently deceased, whose brain is in a special depository. Freddy sends Igor to steal the brain but he drops it and in his panic grabs another jar labeled: "Abnormal - Do Not Use."

Although his creation is assembled with stitches and zippers, Freddy is proud of his work and feels almost as though he were God. Now comes the moment for bringing life. With an ingenious system of harnessing lightning, a huge electric charge is thrown into the body. It fails. There is no life!

Freddy is disconsolate, but that night at dinner he and Inga and Igor hear a mysterious "Mmmmmmmmmm" sound. It emanates from the Monster (PETER BOYLE), who is now alive! He is strapped down to the operating table but Freddy releases him. The Monster nearly kills him before Inga can inject a sedative and they can confine him again. Freddy now learns from a reluctant Igor that he has installed an abnormal brain in the Monster.

Inspector Kemp (KENNETH MARS) calls and questions Freddy and seems not entirely satisfied. The Inspector has barely cleared the castle when the Monster is heard making his strange sound again. The others rush to the laboratory to find Frau Blucher freeing him. The effort to stop her fails and the Monster is now loose. Frau Blucher says that she and grandfather Victor Frankenstein had been lovers and that the first Monster was really their joint creation. The Monster escapes the castle.

The Monster has several encounters, one with a child and another with a blindman (GENE HACKMAN) living alone, in which he demonstrates no ferocity and, indeed, a sort of loving gentleness. But misunderstandings and mishaps dog the Monster's footsteps and only Frau Blucher and her revolver stand between him and destruction. Freddy learns the secret of the Monster's psyche and soon it's off to Bucharest's Academy of Science to show off the new Frankenstein creation who does a classy song and dance bit to "Puttin' on The Ritz". But disaster strikes and the Monster is jailed, escapes and barely manages to survive outraged villagers and Freddy's fiancee who's arrival leads to a climax that is both monstrously funny and horrifically surprising.



YOUNG FRANKENSTEIN

昭和50年10月30日印刷
昭和50年10月31日発行

発行所　東京都千代田区有楽町1−2−1　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町1−2−1　大　橋　雄　吉
© 発行権者　東京都中央区銀座３−10−９（東京フィルムビル）
廿世紀フォックス極東映画会社
印刷所　東京都港区芝２−１−28　成旺印刷株式会社

￥200

ヤング・フランケンシュタイン

